

大 阪 城

第
二
號

明治四十年十一月十五日發行

桝城雜誌第貳號目次

○霧島旅行記

漫

言

青雲舍員

○最近來麿の快博士一對

墨庵居士

雜報

二二

○故島津男爵母堂健子之肖像並ニ吊詞(寫眞銅版)

論

繪

漫

二二

○營利思想の勃興に就て

柳洲逸史
悔堂生

二二

○輕視され易き家庭の弊害

史

傳

五

○加治木歴代の城主(前號續)

岩城豊次
同

五

○加治木教育の沿革

通

信

八

○在米國南加湯田碧水君よりの通信

柳洲逸史
悔堂生

二二

○在清國滿洲大連城川綠波君よりの通信

柳洲逸史
悔堂生

二二

○在大阪市池田孤案君よりの通信

柳洲逸史
悔堂生

二二

○在對馬國袖木彥藏君よりの通信

柳洲逸史
悔堂生

二二

○在肝屬郡鹿屋村林豊吉君よりの通信

柳洲逸史
悔堂生

二二

○詞藻

一四

○漢詩○和歌○俳句

柳洲逸史
悔堂生

二二

○福洲雜錄

雜

柳洲逸史
悔堂生

二二

○水難に遇ふたるの記

柳洲逸史
悔堂生

二二

○讀者之聲

四一

○數件

會

報

柳洲逸史
悔堂生

二二

○雜誌の件

雜

柳洲逸史
悔堂生

二二

○役員の件

雜

柳洲逸史
悔堂生

二二

○本會の基本金寄附者氏名錄

柳洲逸史
悔堂生

二二

○雜誌代の領收

雜

柳洲逸史
悔堂生

二二

○在外雜誌購讀者住所

柳洲逸史
悔堂生

二二

○氏名(申込順其壹)

柳洲逸史
悔堂生

二二

○會告

柳洲逸史
悔堂生

二二

四七



謹みて島津健子刀自を吊す

嗚呼悲ひ哉。舊加治木領主故島津久寶公の室健子刀自、明治四十年八月十八日、鹿兒島市長田町の邸に逝かる。刀自は舊日置領主島津久明男の令妹にして久賢男の養母也。生れて聰明貞淑、夙く先君に別れ、爾來只だ令嬢直子姫の鞠育に他意なく、遂に先年當主久賢男を迎へ、茲に能く繼嗣の任を全ふし、今春更に令孫澄子姫の現らばれませしより、寵愛暨ふるにものなく、春の風たゞその室に満ち、喜びの聲つねにその堂を繞り、人生の快樂、老後の思出、漸くこれよりならむとして、宿痾遽に重りて藥石遂に効を奏せず、溘焉として白玉樓中の人ごならせ給ひぬ。謚名貞操健姫命。享年五十六。嗚呼悲ひ哉。茲に遺影を掲げ、謹みて哀悼の誠意を表す。吁。

桜城雑誌第二號

論 説

營利思想の勃興と就て

柳州逸史

天然の恩恵に浴すること甚大にして海陸の物資豊富なる本縣の如き地方に於て人類が其の自活自存の道を得るは爾かく困難を感せざる所にして外界の財貨に對して各人の行ふ經濟的行動が自から自足的範疇を脱却すること比較的遅々たるは勢ひ免れざること也之と相貢縁して或は其の因をなし又其の果たるものは民俗の純朴なるの点にして從て其の慾望も亦單純なるは當然の數なりとす

斯の如く單純なる慾望を以て激烈なる生存競争を爲すの必要なき吾が縣民は又其の地の僻遠に位せるの事實と藩政時代に於ける鎖國政策の余波を受けて進歩せる現代に至りても尙ほ交通交換の進歩を見ること少く恰かも吾が國民經濟の範圍以外に屬せるが如きの境涯に在りし事由との爲め久しく經濟的武陵桃源の裡焼酎瓶を叩き「オハラ節」を謠ひ悠々として其の生活を遂げ

得しもの也然りと雖ども方今之澎湃せる經濟的激波は滔々として斯の如き孤立的經濟の障壁を打破し去らすんば已まず近時に至りて遂に又往日の仙人的經濟に安する能はざるに至れり換言すれば一たび廣汎なる經濟圈内に投せられし縣民は其の經濟生活の革新を行ふにあらずんば自家の存立を全ふすること能はざるの危機に瀕せるは刻下の狀態也

加之交通機關の發達は物的、心的、文化的を輸入すると多く從て各人の慾望も進化して甚だしく多角的となれり或は一步を進めて言へば奢侈的慾望の挑發をも來せるものゝ如し蓋し吾が隼人族は純朴の風ありと雖ども其の本質に於て激越の資質を具備するが故頗る感情的人種なり斯かる人種の常として壯美、悲美等の光景に憧憬し易く一轉しては衒美の傾向を有するものにして即ち奢侈的慾望の素質を有する人種なりとす斯の如き隼人族が燦然たる文化に接觸しては應分的慾望を超えて奢侈的慾望の挑發を來すは怪むに足りる処吾人が誣言にあらざる可し然り而して其の果して奢侈的慾望の發生せるや否やに關しては深く論究するの要なきも而も近時慾望の複雜に赴けるは争ふ可からざるの事實

にして斯かる多角的慾望の充足は又從來の單純なる經濟生活の到底堪へべからざるは自明の理にあらずや。由是觀之吾が縣民目下の經濟状態に於ては一方に於ては自己存立の危機に迫り他方に於ては慾望の増進を來せるが爲め茲に經濟的地位の向上發展を求めることを希ふの念慮の切實なるものあるに至れり即ち本縣近時金利下落の傾向あるが如き明かに其の証左にして從來借金的自足的經濟を行ふこと夫の韓人の如き彼等が貨幣を以て消費財と思惟せし觀念を一變し生産財即ち資本として其の効用を全からしめんと欲するに至りしことほ自然金利の下落を惹起せる原因の最大要件となりしものなり換言すれば營利思想の增長は現今本縣に於ける顯著なる現象にして之は貨幣經濟の訓鍊を經來れる現時に於ける經濟的行動の心理的基礎が多くは營利心に外ならざれば則ち經濟的發展を希望するものゝ心的現象として當に爾かあるべきのこと也。

吾人は斯の如き現象を以て吾が隼人族の爲め祝福に價するもの也と思惟す何者斯の如き心的現象はやがて現化して經濟上の進歩を來し經濟上の進歩は多くの場合に於て經濟以上に位せる人類の諸生活發展の基礎をなすものなるは所謂衣食足りて禮節を知ると云ふ管子が

が現化の道を得ざるか但し又左道に彷彿して經濟的迷兒たるの悲運に陥らざらんと欲するも豈に得べけんや。實に幼稚なる經濟界に於て營利心の急遽の勃興は大に戒心を要すべしものあり何者彼等は經濟上の事情の糾錯綜するものあるの所以を知らず一氣直に營利心の満足を企圖せんと欲すればなり夫の歐洲の中古營利心勃發の時代に於て尿液を鑄て黃金を發見せんと欲せしが如き極端の行動に出づるが如きとは現今の人類の敢て爲ざる所なるべしと雖も經濟的智識の欠如せる又鍊尿的行動に出づるものなしとも云ふ可からず縣下に於て往々にして見る鑛山熱及び之に類する盲目的投機事業の企圖の如きは幾分這般の消息を漏洩せるの反影にあらざるなき乎勿論健全なる投機は國民經濟上必ずしも排斥すべきものにあらずして特種の人格に對しては適當なる經濟的行動たるを失はずと雖も一般人殊に經濟的智識の欠如せる人類は之と沒交渉なるを以て智的行動をなすものなりと云ふべけれ故に斯の如き唐突なる企圖にあらずして秩序的行動を以て營利心の現化を圖り以て各自の經濟的地位の向上發展を期するは刻下に於ける嘆累的事實に屬する也而して又顧みて吾が縣未だ日本の富豪を以て目すべきものゝ一人を

名言の如ければ也

營利心の喚發を以て直に經濟上の進歩の總体なりとなくは早計に失す營利心は言ふ迄もなく內面的のものなるが故其の外界に現化して經濟的行動の活潑を來せるに至りて始めて經濟上の進歩を見るを得べし而も本縣由來尙武の國として武士的精神の旺盛なるの結果民俗營利貨殖の行爲を賤め爲めに從來經濟上の進歩を阻害せられしと蓋し鮮少にあらざりしもの今や營利心の發現の顯著なるは之れ本縣經濟上の進歩也と云ふも可なり然り而して武士的精神と營利心とは多くは冰炭相容れざるは東西史乘の明証する所にして獨り本縣特有の現象にからずと雖も特に本縣に於ては因襲の久しき其の乖離極端に失し其の影響する所只に封建時代士班に列せるものゝみならず全階級を通じて營利心の欠如甚しく以て今日に迨べるは吾人の喋々を要せざる所なるべし營利心を基礎とする經濟的行動は進歩せる時代に發現が最も微弱なりし吾が縣民が進歩せる經濟的行動に習熟せず經濟的智識の不完全なるは又必然の事實にあらずや既に經濟上に於て其の智識の欠如と行動の迂闊なるに於ては如何に熾烈なる營利心ありと雖も之

如上の現象を看取して之に對する施設を爲すもの甚だ少なく僅かに錦江義會の如きありて之が指導をなすと雖も更に一步を進めて積極的主義の發揚を努めざれば奔馬の勢を有する經濟界刻下の進運に伴はざるものあるを恐るゝ也。

吾人は今這般の施設に對し具体的成案を呈示するが爲め研究の余裕を有せざるは頗る遺憾に堪へずといへども他日更に機を見て愚見を披瀝し以て大方の教を乞ふとあるべし本論の如きは只だ其の緒論に過ぎざる也。

(左の論文を寄稿せられたる山上正一郎君は桝城出身にして目下佐多尋常高等小學校長なり)

輕視され易き家庭の弊害

在佐多悔堂生

余は家庭に於ける總ての經驗に於て決して人々の注意を惹き得る如き智識あり又素養ある身にあらざれども平素多少育児上の實驗と己の立場からして讀書の餘徳がかくは見出の如くなりてかゝれぬ有躰にいへば適切なる一二題目の抜萃である讀者の一笑を得ば望外の賜である。

世間の狀態がまだ一般に良好ならざる今日の時代に於ては家庭に於ける弊害も數多く起り得るのである之れ

畢竟家庭に於て兒童の教育に深く注意せざるよりして然るものゝ元來家庭の主要なる務は兒供の性質を改良する場所にして一種の感化院と云ふ位置を有つて居るべきものなれば朝夕断へず與へらるゝ道徳的空氣は能く注意せざれば子供に對して却て惡影響を與へるに至る例令ば食事の時間の如き一定の時間にすることなくして或時は早く或時は遅いと云ふと子供は空腹に耐へ得る惡習慣（昔の武士は一度や二度喰はずとも云々の如き今日は大に注意すべき價値あり）が起り空腹に耐へ得るに至れば長時間家に歸らず次から次へと轉じて遊び廻り一方には父兄の憂慮を呼起すと同時に其身は神經が衰弱して來て夫れが爲め性質迄生理上變するに至る其結果真に懼るべきもありされば吾が郷里の如き今や幸に時鐘も設けられしことなれば之等を利用し得て出来る丈各家食事の時間を定め置き此等の憂は早く除きたいものである次に現下大抵の家庭に愛用さるゝ彼の牛乳の如き之を單に生理衛生上の点より云へば子供に與ふる事の利益は多大なるべきも其與へる間に於ける僅の處子供が牛乳の飲慾を起して頻に之を求め居る際に於て其牛乳を適當なる温度に温めてから適當なる裝置をして子供に飲ませるには多少の時間を要する然

習俗に誤られ輕視され易い方ではあるまいか。其他もつと立入つて云ふならば吾が郷里の如き家庭の子供は學校以外に於て皆夫れ／＼もよりの學舍に晝夜の區別なく行くし殊に夜間は九時十時迄もろこにて復習などした上又朝は早く近隣の先生の内或は學校より歸宅後迄も復習に行く此等は餘り過度の勉強たる氣付かない恐はあるまいか從て夜間の學舍行なれば睡眠不足の源因ともなり身體は勿論幼少の時から神經衰弱の素因とでも生トはすまいか輕視されて憂ふべき事の限りならずや。

要するに此等は殆んど注意されずして却て注意する事にまざる程子供の爲めに將來重大の關係ある事が等閑にさるゝのはつまりまだ家庭の上に殊に主婦たる人々等の注意寧ろ常識の足りない源因から来る様に思はるされば漸次此等の缺陷を埋むる策として學校などにても數多く母の會や學年保護者會などを企て又一方には知名の士を聘して此等家庭上の講話を聞き萬事に注意を注ぐの習慣を得たいものである。

方針を持て育てる日には母親の威嚴は尙更（只）でない恩威並び行はるゝ如き愛といふ反面には又監督の方面も必要である夫れで決して兩親の區別して持つべきものでなく、共に等しく持たずは兒童教育は出来ない。昔からの歴史も有名な大人物を生せし家庭は父親よりも却て母親の方の威嚴監督の奏効にありしことが殆んど總ての實例になつて居る之等はつまり

加治木歴代の城主

(前號の續き) 岩城 豊次

維新公御逝去の後は、太守家久公の次男兵庫頭忠朝公（幼名又八郎忠平）加治木を領し給へり之を加治木侯の祖す。

第二代兵庫久薰公、第三代兵庫久季公（實太守綱久公之子爲養子）、第四代兵庫久門公（實太守綱豊公之子爲養子、後御正統御相續重年と御改名）、第五代兵庫久方公（後御正統御相續重豪と御改名）、第六代兵庫久徵公（即錦水公也）、第七代兵庫久照公、第八代兵庫久寶公（即又八郎第九代兵庫久長公を經）、第十代兵庫久徳公（即又八郎公）に及んで明治維新廢藩の世となりぬ（完）

附 島津家の祖忠久公の薩州へ御下向は加治木第八代親平の代にあり、肝付氏の墓は日本山東禪寺にあり、永く祭祀を絶ち今や荒廢して藪の中にあり、吊者をして轉た懷古の感に堪へざらしむ、

加治木教育の沿革

岩城 豊次

育英館の沿革概略

學校設立の事蹟不詳と雖舊領主

城

松

城

學之臣、創沖宮、建鄉校、如我本藩、久已置學、濟々多士絃誦時習、達材成德、禮樂制度、海內莫與京、殆將復周之舊也、而迺松城之於本藩、亦猶曲沃於晉哉、越今茲甲辰秋、公損貲、買數頃地于城西綠荷園之傍、研其榛莽、焚其茅篠、坦然而平除、以新建鄉校焉、其堂東南嚮、列席二十有餘、西廡置五塾、命曰毓英館、蓋公之志、欲使邑中人士從事于斯、不知不識饗飫涵泳、綽然就詩書之善教、倣程朱之正學、移風易俗、政治教化之端、從是而起焉、可謂千載之盛事、不朽之德惠而已矣、於是乎、古所謂、國有學、術有序、黨有庠、家有塾者、可徵諸今日也、豈不愉快乎、昔冉子有言曰、旣庶且富、又何加之、孔子曰、教之、然則公之於松城、旣已使繁庶、又殷富之而今教之、亦猶行古之道也、今而後邑中人士、夙興宵寐、孳々以勉、如時雨化之、鬱乎成材、以爲邦家之幹、則毓英之德愈益昌、大古之道不墜矣、其果有不待文王而興者、昔天明四年甲辰秋八月十五日記

附 世肅は長崎の產にして年二十四の時即安永年間當地に來遊し冬日は江戸の產にして山本北山先生に師事し、共に同時に聘せられ學校設立に盡力し且生徒教授の事に任す久徵死去の後學校漸次衰頹文政之初全く廢絶

島津久徳儒學を尊ひ伊藤世肅秋岡冬日を聘し専ら教育の任を囑せり世肅嘗て撰ぶ所の文を左に記し學事の一班を徵す、

經曰古之教者家有塾黨有庠術有序國有學、孟子又曰夏曰校、殷曰序、周曰庠、學則三代共之、皆所以明人倫也、併而觀之、古之時、上自王宮國都、以及州閭鄉黨、莫不有學也、周衰而學政不行、諸侯暴恣、政由彊國、是以仲尼于七十餘君、而無所遇、秦焚之後、詩書禮樂之教、掃地而盡矣、漢興八十有餘年、始置學官、逸文古籍、往々乎出、郡國諸侯爭援文學之臣、一時唐康哉之頌者、不爲不多、從是已往、東漢三國漸至六朝之麗靡、蓋當是時、謂天下無學政亦可也、李唐中葉螢々正學於不傳、道德仁義孝悌忠信之道、章々乎如揭日月、沛然無有不被其澤者焉、伏惟我皇和寧平之際、奎璧騰芒、大修文德之政、朝廷不乏其人、自此其後于戈相繼人莫寧處、時一二縫腋之徒、雖有倡正學、亦唯沾々私淑未能偏施焉、至神祖龍興、乃棄弓矢、夙收羅山于輦轂之下、新民垂教、三代聖人之道、炳焉復明於世、扶桑文明之運於斯爲盛、天下諸侯無不服、各自聘文函館諸所の烈戰死力を盡し其の功勞により忝く褒賞を蒙りたる百十有餘名の壯士は悉く皆當校の養育する處のものなれば薰陶の効居多々云々可し、

教科用書 孝經、千字文、四書、五經、國史略、十八史略、元明史略、史記、左傳等、

職名俸祿 教授一名訓導師四名以下句讀師六名、役料扶持米は定規なし持高所有の者は高役と稱し無給然れども持高少なき者へは五石以下を給せしことありし、

通
信

(左の原稿を寄せられたる湯田仲二君は松城出身にして目下米國ロースアンセルス市にあり熱心實業に從事せらる)

同鄉會の設立を祝し併せて

會員諸君に望む

附在米南加同村人の概況

在米羅府 湯田碧水

加治木同鄉會々員諸君、秋高く氣澄む季節諸君健在なりや否や、曩に我村の親睦を厚みし我村の繁榮を圖る目的を以て、同鄉會設立併せて雑誌「松城」の發刊を企られ、遙に其一部を送與せらる、厚意多謝々々、而して同鄉の諸君好く世運の趨向を洞觀し、從來の感情を一洗し、協同一致公的精神を發揮し以て本會の成立を容易ならしめ、併せて雑誌「松城」の發刊を見るに至りしは、固より島津男爵の指導畫策其宜しきを得たるによるや勿論なりと雖、亦以て有志諸君の熱誠なる盡力の結果たるを信す、在米の同村人此快報に接し遙かに贊同祝賀の意を表せざるものなし、凡て業は創む

較少なきを以て、風紀は紊乱し道義は地を拂ひ、爲めに世路の艱難を嘗めざる薄志弱行の徒は、忽ち惡風に感染し誘惑物に征服せられ、酒々として墮落の深淵に沈淪するもの多し、然るに我村人中には未だ甚しき墮落者を見ず、全村人の増加は吾輩の大ひに歓迎する所也、雖然亦一面に於ては往々不幸者を一するを免れず、於此乎吾輩不敏を顧みず、不時の變に應する爲め、曩に備急會設立の必要を全村人に訴へ、以て村人の贊同を得、昨年七月以降會員は毎月金參弗づゝ貯蓄する事とし、今に依然繼續實在中にあり、目下銀行に預入れある金額は米貨四百八拾二弗、即ち日貨九百六拾六圓に達せり、在米南加の全村人が如何に一致協力、以て生存競争場裡に奮闘し居るかを諒察せられたし、當時吾輩が全村人の贊同を求めし、備急會設立の趣旨及規約書を左に掲げ以て諸君の一覽に供す、

備急會設立の趣旨

三千里外の異邦に來り生存競争の渦中に身を投し、敢て苦戦奮闘を辞せざる所以のものは、蓋し吾人が經濟的の成功の彼岸に達せんことを期すれば也、然るに此目的を達せんとするや固より一朝一夕の能くする所にあらず、必ずや五年乃至十年の歲月を要す、而して此永

るに易く守るに難し、希くは内外の同村人協力以て本會の目的を貫徹するに努力せん、
加治木同鄉會々員諸君、諸君が奮然蹶起同鄉會を組織せしや善し、而して本會の目的を達するか否とは一に諸君の覺悟如何に存す、願はくは本會をして龍頭蛇尾に終らしむる勿れ、益々奮つて本會の隆盛を圖り之を終しては我村の福利を増進し、之を大にしては國家の富強に資すべし、若し夫れ加治木村の繁榮を誇致するには、農を先きにすべきか、或は商に頼るべきか對しては、農を先きにすべきか、其他加治木村の繁榮策如何に將亦工を取るべきか、其他加治木村の繁榮策如何に改め筆を染めて諸君の高教を請はんと欲す、
べき方法設備は、賢明なる會員諸君の既に研究調査の途にあるを信す、吾輩亦聊か早見のあるあり、更に題開話休題北米合衆國加洲に於ける、加治木村人は目下四拾余名にして北加洲即ち王府麥嶺に拾余名、南加洲即ち羅府(ロースアンセルス市)に在るもの殆ど參拾名に近し、當羅府は人口二十八萬を有する南加洲唯一の大都會にして、殊に新開地に屬するを以て、農工商の發達實に日進月歩も啻ならず近き將來に於て當さに桑港を凌駕すべし、
當國に於ける同胞界は社會の制裁力薄弱に、輿論の刺

備急會規約書

- 一、本會は在米南加加治木村出身者を以て組織す、
- 二、本會の名稱を備急會す、
- 三、本會々員は毎月金參弗づゝを二十五日迄に委員へ送金するものす、
- 四、委員は毎月二十六日抽籤を行ひ當籤者の名義を以て即日銀行に預入れをなすべし、
- 五、會員の貯金通帳若しくは証書は委員に於て保管すべし、
- 六、會員中疾病又は不慮の變に罹り困難の者ある時は貯蓄金を貸與することを得、
- 七、本會の目的は會員の疾病治療及歸國費に充用するにあるを以て第六項及本項以外には如何なる名義あるに不拘貯金の拂戾をなすことを得ず、
- 八、會員中より委員二名を選定す、
- 九、委員は在羅府にある會員中より選定するものす、
- 十、相談役二名を置く委員は緊急事件の生じたる時一應相談役の意見を徵し處理すべし、

會員氏名

木佐木	莊一郎	松田	傳之助	藤崎	榮次
藥丸	周藏	松木	忠熊	生駒	甚太郎
生駒	清治	立山	清藏	楠元	彦市
竹下	貞彦	白尾	節志	有川	貞雄
木場	政度	三反	市左衛門	住吉	市左衛門
今西	三四郎	下津佐	正志	福島	仁助
木佐貫	重彦	湯田	仲二	以上二十人	

(左ノ原を寄せられた城川甚之承君は桜城出身青年にして目下大連にあり)

満洲より 在大連 城川綠波

拜啓時下秋冷の候各位益御清祥之段大慶至極に奉存候
、扱て先日は満洲浪客の鄙生に迄、御丁寧にも雑誌桜
城を御惠與被下難有御禮申上げ候、取立て申上可き
程の事には無御座候へ共遠く故園を離れて、人情風物
を異にする異郷の地に於ける吾人に對して最上の慰藉
者たるべきものは祖國の新聞雑誌！尙ろれよりも侍
たるゝは只一片の紙片！故郷よりの音信にて御座候
、殊に満目の荒涼たる當地に於ては一層此感の切なる
を覺へ申候、然る処今や郷里の音信とも申すべし吾が
「桜城」の御惠送に接し眞に狂喜措く能はざる處に御座

(左の原稿を寄せられた城川甚之承君は桜城出身池田君は舊名美坂仁之助氏にて目下大阪にあり、實業家なり)

雑誌「桜城」來る 池田孤案

友人田上君からの信書の端に、而かも小さい文字で、
「雑誌「桜城」ほ來りしや」とあつた、「桜城」！あゝ此二字、何たる懷かしき珍文字か、今が今まで夢露知らなんだ僕は、暫時得も謂はれぬ無量の感に打たれて、取る手も握しと蒸氣の夫れにも似たる胸の鼓動を押へつ筆オツ執て問返した、萬事に親切な同君は早速返事を呉れて、委細は載せて桜城第一號にありと知らした、顧れば生れて拾七歳、瓢然故郷を去て玆に拾有五年、今や時恰も秋高く馬肥へたり、只さへ物思ふ今日此頃、慕郷の念は一時に僕の全身を驅て感百出、愈々得堪まらぬ心地、時も移さず教へられた同郷會事務所と云ふに、往復端書で開合して鶴首待つこと週日、日は來にけりな十月十二日、秋雨蕭々として窓打つ夕、一聲高く寂寥と破つて郵便！と共に健兒桜城は一片の返書を添へて着したのであつた、食に飢へたる狼の如き僕は陶然た瞬時を過ぎ、頓て繙いて内容を窺へば、コハソモ想ひ當てたりな此寵兒！今更秩序的に言はず、僕は今此吾郷空前の好機關誌に接して無限

候、就ては狂喜の余り渡満以來短日月の間に見聞したる當地の狀況一寸御通知申上ぐ可く候、旅順市の商況は一般不振の状態にて只僅かに關東都督府、海軍鎮守府、其他二三の官衙によりて市民の商業は營まれ申候、次に満洲の門口當大連市は一見非常なる好景氣の如く見受けられ候へ共、之れ亦其實際は空景氣たるを免れずして、全く新に渡來せし内外人の無意味にさわぎまはる幻影に外ならず候、只當地市民の一般にたよりとする處は、一つの満鐵經營を中心とせる諸種の事業に止まり候へ共、之れとて三井其他二三資本家連に支配せられて、資本なき事業家は全然失敗に歸し申候、此間も當地を一つの黃金郷の如く思惟し、時代の風潮にかられ一定の目的もなく漫然渡満せしも、案に相違し目下北公園の四阿家に水とパンとを囁りてからくも糊口を凌ぐ二三の衰れる人も有之候由、斯くては折角血と劍とにて得し遼東の野も早晚黃金万能權力万能の巷闊と化し去り、圓滿なる満洲經營は得て望む可からざる事かと思考仕候(中略)終りに臨んで雑誌桜城の健全なる發達を祈り併せて同郷會員諸賢の祝福と御健勝とを奉祈候、

(左の祝詞を寄せられたる袖木彦藏君は松城出身にして目下對馬國竹敷布設隊附武官なり)

祝松城發刊

對馬竹敷布設隊附 袖木彦藏

快樂なる哉快樂なる哉嗚呼快樂は人類諸般の生活上必須の要素にして吾人が國家社會の爲めに貢献するの活力を供給する人類活力の原動機でありますれば人世焉が快樂を排斥する事が出來まよ一や然り而して快樂の種類は甚だ多いから之が撰定は大に慎まねばなりませんが今吾輩は眞善美的性質を具へたる快樂として雜誌松城を得ましたのは大に同感に堪へぬ次第であつて實に覺醒の心地が致しま玆に快樂なる原動機を組織せられたのは島津男爵主幹の下に我が松城の有志同心協力の賜である事を感謝しますと同時に吾鄉人が至

真至善至美的光明を望むの氣運に向へるを祝します然れども此事たる個人的營利事業に非ずして社會的公共事業なるが故に一朝一夕の勞を以完成する事難く前途遼遠なりと思ひます誠に創業は易く維持と云ふ事至らず候

す途方も無き空想に耽り碌々として是迄暮し來り候處

這回人の勧めに因り不圖一會社の使用人と爲り牙籌を侶として金錢勘定に從事する運と相成り候に付ては自分ながら運命の奇なるを訝り笑止に不堪候

蓋し銀行業も其道に熟すれば隨分面白味あらんと信し候へ共僕の如きは何が何やら薩張り分からず算筆拙劣にて記帳の方式をも知らざれば中々趣味を覺ゆる段に至らず候

僕の初めて入社するや極めて簡短なる一事務を命ぜられたるも遲鈍なる此身に採りては頗る困難を感じたり事務頻りに輻湊すれば氣愈々急心益々忙而かも頑固なる指頭は意の知く運轉せず流汗衣を濕す仕事は遲々として捗らず早朝より深夜まで日曜も祭日も殆んど休まず暑中も暑を忘れ寒中も寒を忘れ一生懸命夢中になりて執務すと雖も其職分を盡す事能はず實に慚愧の至にて御座候

翻て想ふ去る二十三年の冬東都に於て故福澤先生に面するや先生懇々僕に諭して申さるゝに天下國家の經綸は後廻にして先づ手近き技能を修めよ學理の蘊奥を研究するよりも早く日用の事務に通し調法の器となるべし云々を當時僕は大不服にて先生の言は卑俗採るに足

を満腔の熱誠を捧げて切に祈るのである。

(左の通信を寄せられたる松城出身林君は舊姓宇部宮氏にして目下浪速銀行鹿屋支金庫に就職中なり)

は中々六ヶ敷ものであるろーですが然し剛毅の氣象を以て百折千挫すと雖も不撓不屈銳意熱誠以て同郷の士内外相呼應して事に當らば其成功や期して待つべしであると思ひます我輩は身を軍籍に投しましてより殆んぞ十有八閱の歲月を一日の如く暮して居りますが其間決して郷里の事を忘れた日はありません郷里の爲め何か尽したいとは思ひますけれども何分我々の微力にては逆も叶ひませんから只だ一命を國家に捧げ忠君報國以て郷里の爲め幾分かなりと尽したいと思ひますから同郷の諸士幸に微哀御洞察を願ひます

聊か蕪辭を述べ謹で祝意を表し併て「松城」の發達を祈ります 終り

(左の通信を寄せられたる松城出身林君は舊姓宇部宮氏にして目下浪速銀行鹿屋支金庫に就職中なり)

一筆啓上 在鹿屋 林 豊吉

向寒の砌諸兄益々御清適の由奉恭賀候

近來御無音に打過ぎ候諸兄に對し乍略儀雜誌の余白を借り音信申上候間御容恕被下度候

却説僕は昨年の夏男爵島津邸を辭して株式會社浪速銀行に入社仕候僕は元來痴愚短才毫も處世の術を解せ

らずと爲したりしが今に至り悔恨禁すべからざるを覺へ申候

噫々青年時代に志望遠大を尊びたるは失策なりしか聖賢の教を奉して治國平天下の道を修めんと欲したるは過ちなりしか高僧名哲に學びて宇宙の眞理を究めんと欲したるは惑なりしか英雄豪傑の氣焰に感激して漫に萬國統一の策を案し世界の大統領を夢みたる如きは甚しき迷なりしか往事を追憶すれば猫兒に生れたる身分を以て百獸の王たるを期するに似たるもの多し抱腹絶倒せざるを得ず又た痛嘆大息せざるを得ず

乍併既往の過失を今更後悔するも無益に候間如何に冷笑さるゝも嘲弄さるゝも顧みず一意專心いろはのいの字より學習し馬車馬的に進行するの外なしと存し候道歩險峻なるも貨物過重なるも倦まず撓まず斃るゝまで盡瘁力行中に御座候

僕は鹿児島本金庫に於て刻苦練習する事五箇月余昨年一月に至りて岩川支金庫に留學を命ぜられ恰かも幼稚園を出てたる兒童が尋常一年級に移りたるの思を爲して彼地に出向致し候岩川に留まる事殆んど一歳本年の初に至り更に鹿屋支金庫に轉學の命を受け今猶當地に

於て稽古中に御座候
指を屈すれば實地に就て練習する事最早八百余日に相成候へ共未だ全く其事に通せず前途暗黒一點の光明をも認め得ず只だ瘦骨に鞭撻して暗中を探り行くのみに御座候

凡る老後に種々職業を變更するは勞多く功立ち難きものに候間初めより架空の大目的を戒め能く自身に適合したる職業を撰定し一心不乱に其技を磨き其術を練り以て世界萬國の競争者と輸贏を決するの用意あらん事を我郷の青年學生に希望仕度候青年時代は角意氣壯大に過ぎ動もすれば實務を疎んし晩年躋を喰むの悔を貽すに至る傾向有之候間宜しく遠大的目的を立て高尚の品格を修養すると同時に日用の事務技術をも併せて練習相成候様祈る所に候

目下出納臺裡に役々苦戦しつゝある僕の實驗に徵し敢て啓上仕候微衷の存する所御諒察被下度候

猶岩川鹿屋地方の狀況等は次回に御報道申上べく候勿々不一

詞藻

(左の漢詩を寄稿せられたる天樹平原長正氏は鹿児島市の人にして、日下加治木警察署長として當村の爲め大に尽されつゝあり)
◎霧島山中口占五首錄二
平原 天樹

其一

白日雷霆天外轟。噴煙怪狀使人驚。西賢識否此靈跡。
倒立神鉢萬古明。

其二

奇峰矗立峻難攀。光焰衝天三國間。漠々濛々煙不絕。
今猶疑是造雲山。

○錦江矚目

全

上
錦波溶々碧如油。十里江山入寸眸。景勝何邊最宜見。
曉煙暮靄是櫻洲。

子 福永祐功
福永祐功

たらうねの乳房ふくみてうまいする
子の笑顔ころ床しかりけれ

故郷殘菊

折田種春

白菊の花ころのこれ霜ねほひ

する人もなき故郷の庭

月前千鳥 肝付藤四郎

橋守のわらやの軒に霜みにて
更たる月にちどり鳴也

川畑恒治

和歌の浦うちいて見れば白妙の

雪にかみやく玉津島山

肥後友滿

閑居燈ともし火の細き光りも淋しきに

虫のねしけし蓬生の宿

佐藤友樹

朝またき霜をふみつゝ引駒の

あおども寒し小田畦道

森山常子

住馴し草のいほりも淋しきは

雨のふる夜のね覺也けり

鐵橋

森山まん子

黒金の橋のうへにやかみりけん

わか乘汽車の音のかはれる

俳句

緑波

十年の宿志夢なり今日の月

(左の原稿を寄せられたる榕城出身壹岐休太郎君は元清國武備學堂教師にして目下郷里加治木にあり)

雜纂

福州雜錄（其上） 菊廻舍

福州は其昔清佛戰爭の古戰場として又有名なる馬尾造船所の所在地として少しく世間に知られてあるのみで決して北京南京の様に大都會でもなければ又上海漢口の様な貿易港でもないのであるところで在体に言へば其所在地すら知らない人が多いので又さまで知る必要が無いかも知れぬのである併しながら此福州は清國が不割讓の誓約を我れに與へたる福建省の首府で人口六十五以上を有する都會で實に南清地方の重鎮である上に我が新領土臺灣とは只だ一葦帶水を隔つるのみで呼べば將に應へんとする所であるから從て船舶の往來も頻繁に彼是の商業も日を追ふて盛んに我が同胞の渡航者も年一年に多くなつて將來大に有望の土地であるのである去れば其内容を調査して種々の事情を研究するとは不必要な事でもあるまい特に清國が二十世紀に於ける世界の活舞臺であると云ふことを眞なりとすれば心

ある人は今日よりして大に其内容を調査するの必要はあるまいか又南清經營と云ふ問題は遠く北條足利時代の昔より徳川の初めに掛けて我が祖先の屢々企てし問題であつて十分の成效はしなかつたが是れは一に地勢の利氣候の和が最も我が發展に適して居るからのことであつたらうと思はれる今は時勢に驅られ多くの人が北清の野を跋涉するやうであるが余は南清地方の有利なることは彼胡馬嘶く湖北の野には比すべくもあらぬと思ふのである

如上の見地からして余は在福二ヶ年の間を利用し種々の方面に渡つて多少の調査をしたのであるが今編輯員諸兄の勧めに依つて其大要を此雑誌に記載することになつた若し之れが多少にても諸君の一顧に價すると思はば實に無上の光榮であるろこと余は便宜上各の左項に分類して記載することとするから豫め御承知を願つておきたい

- 一、總論
- 二、地理
- 三、人情風俗
- 四、衛生
- 五、教育宗教
- 六、軍事
- 七、產業
- 八、交通及航路
- 九、琉球との關係
- 十、結論

一、總論
福州は西歷一千八百四十三年英清間に議決せられたる南京條約に依り廈門廣東寧波上海の四港と共に開港せられたる地にして人口凡る百萬福建省首府のある所なり其位置北緯二十六度二分二十四秒東經百十九度二十分にして我が沖繩と略ぼ緯度を同ふし澎湖島と經度を同ふす地勢山岳多く平地少く東北の両面は全く山岳に包まれて西南に平原を生す其面積凡る十二方里あり之れを閩江の平原となす閩江は實に福州の利源にして猶ほ楊子江の上海に於けるが如く舟楫の便灌漑の利一に閩江に資る氣候は溫暖にして終歲殆んど霜雪を見ず一年中最底溫度四十二度最高溫度九十八度平均六十五度にして天候は三、四、五月の雨期を除き他は概ね晴天なり

水難に遭遇したる記

在鹿屋林 豊吉

七月六日の洪水は當地未曾有の大洪水にして濁流滔々四方に氾濫し橋を流し堤を破り田畠を埋没し家屋を倒壊し鹿屋町全部を忽ち一面の海と化せしめ頗る慘状を極めたり僕等の詰所鹿屋支金庫も殆んど軒端まで浸水し家屋も將に押し流されんとする勢に立ち至りたれば詰員一同天井板を破り屋上に抜け出で一隻の救助船を呼び寄せ辛うして避難するを得たり夜中に及び水は滅

史に據るに福州は古昔閩地にして禹貢の揚州域に屬し周の初め七閩となし春秋以後越の地となす秦に至り百粵を平げて閩中郡を置く漢の高帝五年始め勾踐が十三世の孫無諸を封して閩越王となし此に都す後武帝元封の初め縣を置きて治縣と曰ひ會稽郡に屬せしむ東漢に至り名を更めて東侯官となし會稽南部都尉の治となす三国時代にあつては吳建安郡を置き晋代にあつては

晋安と云ひ揚州域に屬し後江州に屬す宋の泰始中更に晋平と名つけ齊梁復た晋安郡を置く陳定和の初め閩州を置き東揚州に屬す後又豊州を置く隋に至て建安郡となし後泉州に改む開元中又改めて江南道に屬す天寶の初め郡を改めて長樂と曰ひ乾甯中威正節度を置き五代の王審知其地を據有し閩國の都となす唐の長興四年審知が子延鈞長樂府と改む晋の開運の初め南唐に属し又吳越に屬して福州となす周彥武軍に改む宋福建路となす至元中路を升して福建道宣尉司治となす明の初め福州府に改め洪武九年福建布政司治となす清朝に至り閩浙總督を置き治せしめ以て今日に至る

退したるもの家の内外泥濘堆積如何とも手の着け様無之僕等即ち假事務所を肝屬郡會議事堂内に設け同所に於て事務を執る事二週間の後僅に應急の修理を了し原詰所に復讐するを得たり然しながら宅の周圍に累々たる汚穢の泥土あり紛々として異臭を放ち猶ほ室内の隅々に惡臭の存在するあり勿論門扉も無く塙塈も無く日々の事務は往來の人々の縱覽に委せざるを得ず其光景實に可笑約二十餘日の間路上の泥濘排除完成に至らず官吏も教員も田植然たる裝束にて通勤するの状亦た奇觀なりき僕は生來始めて水難に遭遇し治水の等閑に附べからざるを感する事切なるものあり今回の洪水に鹿屋村の被害九萬七千圓以上の價格に及ぶと聞く而して水害の因由を尋ねるに雨量の非常に大なるに由ると雖も其一は上流の山林を濫伐したる事其二は某が私有地を保護する爲め河身を侵食して堤防を築きたる事其三は某が水車業を營む爲め河中に堰を設けたる事其大禍因を爲すものゝ如し抑も一村の重なる人士が私利の爲めに洪水の氾濫を助成し公共の福利を害する事此の如きは眞に苦々しき次第なるが當局者は此際斷然治水の策を決し當地安全の基礎を定めんとして屢々協議を凝つゝあり

寒き夢路を辿る。深き眠より夢覺れば已に五時。遠近の山野霞棚引きよ／＼と青葉を渡る朝風の涼さに昨日の苦痛も忘れ六時愈々發足す。旅路漸く奥深く。雜談も此處其處に湧き。歌ふあり。吟するあり。笑ふ叫ぶ内いつしか羊腸崎嶇たる牧場の坂も通り越て七時半牧場に着す。此邊展望中々に好く北隅の連山漸く脚下に起伏し錦江灣さては櫻岳の英姿も今は築庭の其の如きに初て胸開け。ふゝろ浩然の氣に満たされた此處を立ち出で再び峻坂を登る。あゝこの坂道ころ真の難澗路なり。さなきだに昨日來の疲弊にかてゝ充分の食なく飢渴は容赦なく迫り坂山蓋世の勇士も漸く病するを得たり。破顔一笑温泉に飛び込み旅塵を洗び去り。浴衣を着けて互に健康を祝し、時の愉快は千古不滅である。長途の疲倦だ癒へざるに自炊準備の命令は下た。總員右往左往に走せ交ふ程に二時頃半熟飯に酸き漬物五切が漸く渡つた。しかも山海の珍味にも増し

て美味無雙。腹中一物なき健兒如何に之を歓迎せしかば知る人ぞ知らん。明れば十二日夢は谷川の轟々たる水聲に破れぬ朝霧天地の神祕をつゝんで居る頃宿舎の都合より明礬温泉へ移轉す。此地水聲なく。後方には亭々天を摩す老松古檜林立じ西の方僅に開け。夕には紫雲棚引く落日の景をもものし得て身仙境にあるが如し。吾等一行は之を三部に分ち各交代にて炊事。雜務を處理すべきの命あり時に採薪の令下るなど秩序整然たる風である。各員皆業務を終れば嘻々として遊ぶあり。手帳取り出し日記認ひるあり。入湯するあり。或は故郷の山川を慕はむ爲杖を遠く築之尾に曳ぐ者もあつた。斯の如く吾等は旅行の樂と種々の經驗に浴しつゝ私は登山日和を鶴首して待たれ機容易に來らす。

壯士將に肥肉の歎に耐へざるの感慨あり。昨日今日と暮す内早や十四日となりぬ。三伏の真盛りとは云へ此處霧島の麓なればにや冷風破窓を透り輕装の吾等をして暖き夢路をたゞらしめず。四時寝を蹴て戸外に出づれば星斗爛々。蒼空を飾り。四顧寂寥沈々として唯虫の聲淋しげに寂寥を破るのみ。空は白みぬ。霧は晴れぬ。青空一碧藍青より濃じ。今日こそ登山日和と直ちに準備を成し水筒代理のビール瓶腰にして一行肅々

嗚呼公共心缺乏の徒をして其利を恣にせしむるときは如何なる禍害を釀成するに至るや知るべからず一村の經營に任する者希くは鑑みる所あれ僕は單に鹿屋のみならず我郷の爲め切に之を祈るなり

霧島旅行記

青雲舍員

天日漸く人に遍り烈炎赫々。精氣衰へて睡魔襲來する盛夏八月十日我が青雲健兒三十五名は健脚を奮て北隅靈山霧島に登嶽を企てたのである。脚絆草鞋に身を固め糧米約一升八合と衣類其他雜具入の囊を肩にして輕々と旅程に上りしは丁度午後の四時頃である。此日暑熱常に異り陽炎徒に人を炙り流汗淋漓。塵埃万丈口も夕煙に鎖され光景模糊。田面を渡る涼風の蕭然として面を掃ふなぞ心氣實に爽快である。進む程に水天淵發電所に到る。夜の事とて電光爛々として晝を欺くばかり。附近にも三四の燈火見へ昔の所謂陰風捲きて冷氣骨に透る的に比して別天地の感がある。旅塵を蹴て進むにいつしか安樂、犬飼瀧、中津川なぞ過ぎ十一時半横瀧の茶屋に着す。こゝ健兒の逆旅なれば旅装のま

と客舎を出づ。榮之尾邊の佳景を賞する内いつしか坂坂を成す森林帶に入るや万木天に參し日光洩れず。千古の老樹右に倒れ左に朽ち蛟龍の伏るに髪號たり。時に怪窟あり。時に水簾の縦々として潭石に落つる音なぞ聞へ陰寒晦冥にして淑靈の氣自ら湧く。一步一喘登岸打つ小波なぞ殊にゆかし。暫時浩然の氣を養ひ再び内大浪池畔に達す。水清深にして水上一片の浮葉なく事一時間計りにして叢深き御花畠に出で歎聲叫聲の聲一時間計りにして叢深き御花畠に出で歎聲叫聲の聲

後にして幽谷を出づ。塵埃と炎熱に苦められつゝ牧場中津川を經て新川に沿ふて進む。古里暮ふ歩早く。いつしか水天淵。日當山など通りこし四時宮内に着す。此處にて饅頭の供與あり。馴れし道急ぐ程に小田。小濱など夢の如く過ぎ越し夕日さす頃一同無事龍口に着し此處にて互に長途旅行恙無りしを祝して分る。浩々雄大の氣を吸ふて歸る故郷の空!!

今や吾々は七日の糧と雜具を肩にし飢渴と炎熱に打ち勝つゝ十里の塵程を蹴破り一氣霧島山を衝き未だに経験なき自炊生活を成す意氣壯なりと云はむか。しかもろが大部は十三四五の乳臭兒なるに於てをや。あゝ彼等は眞に乳臭兒なり。紅顔兒なりわに悉く氣骨凌々の健兒のみならむや。中には暖富の家庭に生れ王侯同様に育ちしものなきにあらず。寶兒として両親骨肉の愛におぼれし者無きにあらず否や十中七八は皆是等の徒なりし也。自炊生活の如何なるものなるかを知らざりし者のみ。糧を肩にして山川幽靈の地を跋跡せし経験なき者のみ。思ふに此僅々七日の旅行が太に青少年の身体を鍛磨し不屈不撓の精神を興へ粗食に甘んずるの良習慣を興へ。一致團結の心を養成せしにはあらざる無きか。世の所謂溺愛兒たる者宜しく此の如き行に

身を投ト戰勝國第二の後繼者たるの價値を擧ぐ可き也蓋し本舎の旅行の主旨は全く身體と精神の練磨にあり地歴参考等に資するは是を第二に置くもの也。今や旅行直に鉄路を連想し珍肴佳肴の樂も伴ひの秋に當り此の舉あるは聊か青少年の志氣身體を鼓舞する一幾からむか。

漫言

最近來麿の快博士二對

墨庵居士

燭理明、持論公、決機敏、料事審

△僕の所謂快博士とは、一人は法學博士古賀廉造さんで、一人は醫學博士高木兼寛さんである、

△この兩博士は、東宮殿下御行啓につき公務を帶び共に相前後して來られたのである、

△前者は學者で官吏だ、しかも内務省の警保局長と云ふ花形役だ、後者は醫界の元老でうして男爵の國會議員だ、

△ところが古賀博士は學者臭くもなく官吏めいてもいない腹のある高潔な男で、行政官としては此上もない丈夫である、地方官吏などには古賀丸でも製らへて呑

ませたい氣がする、
△僕は古賀博士と初會だが、なか／＼氣に入つた、で例の九州第一樓萬勝亭に會飲した時、駄作の都々逸を書い見せた、それは、

『義理と人情で固めた日本と謂ふのだ、處で博士は低唱三四手を打つて快哉を叫ばれた、

△ろこでは非何か心意氣を乞ふたら筆を取つて示されたのが、

世界の平和をしよつてたつ』

と云ふ句であつた、これだけでも古賀式の人格の幾分が察せらるではないか、

△博士は煙草はやらず酒も餘りいけない方だが、元來が洒落な人だけ俗歌などにもなか／＼趣味を持つてられる、中にも筑前琵琶の如きは御手ものだ、

△それから高木博士だが、此人また醫者らしくもなければ、貴風呂吹かせず、華族様の空意張もせぬ無難作士である、それで婦人社會にゐるのも無理はない、

△博士性頗る磊落、酒もやれば煙草もやる、口も八丁

、手も八丁の男だが、僕、コップ酒、薩摩式「爪かん」には流石の博士もたぢくの体に見受けた、が後を見せぬ博士の笑聲未だ尙耳底に残るの感がする、△以上述ぶる大兵の両好漢今や六十歳に近く、壯心尙ほ已ます常に思想界の先頭に立ちて議論堂々一世を睥睨するの慨あり、而かも其の人格の亭然として凡俗を超絶しているのは、蓋し偶然ではないと思ふ、△必竟斯の如きは自己の天賦の精力を遺憾なく働かし、日々向上發展せしめし結果に外ならずと信トて疑はないのである、

△ほれた弱みて云ふのトやないが、幸に吾輩と同感の士は両博士に鑑みて共に奮勵一番したいものである、

雑報

同郷會發會式

四十年十月十三日、網掛河畔の有爲舎に於て同郷會の發會式を舉行するといふので、村内に普く通知書を發し、委員はるの前日より、綠門をつくるやら、室内を裝飾するやら、大方の準備は整へて、明日の盛會を祈りながら、夕刻れのがしゃ家路をさして散トたので

ある。

ところが、ろの夜遅に雨が降り出し、翌朝になつてやみろくな氣色はない。これでは折角の出會者も躊躇する向きもあるべく、盛會を期して居た今日の式況をあらうかと頗る心懸りで耐らないけれども委員は朝から出かけて、綠門の上に國旗を交叉する、數十尺の竿頭に旭旗を翻へし、それから四方に世界各國の旗を繩張りにする。室内正面の一段高い處に演壇をしつらへ、二ツの青磁にけざやかな色の菊が池の坊流に活けてある。天井には幾百と數知ぬ小さな國旗が、幾條となくさしわたされて景況を添ねてくれる。

こうならなくちや嘘だ、とは思つてゐたものゝ、ろこが人間の弱い處で、いよ／＼霽れたとなると意外なおもひもする。偶然でないやうな心地もして、何だか辱いといつたやうな氣にもなる。

「難有いな」と、心に好運を感謝してれると、定刻の二時近くなる。ろろ／＼と出會者が見ゆる。何しろ昨

宵から今朝にかけての大降りであつたのだから特志家が多いとしても、百人はさうあらう、餘程多く見積つておれ位いな處だらうとは、目端の利かぬ僕ばかりの胸算ではなかつたらしい。

處が、運の好い時はそこまでも好いもの、微妙なる天の配濟は全くわれ／＼凡慮の容易に覗いするどころではないので、出會者はひき續きばつばつと押しかける。

ぱづ／＼だ、けれどもそれがみなこゝに寄せて來るので定刻を過ぐる頃には豫想以上の人数が集まつたのである。

やがて島津久賢男は、鹿児島から新聞記者東孤竹氏同道で見ゆられた。

出會者は未だなか／＼やみろくな氣色もないが時刻も過ぎたので、いよ／＼席を改めて會にうつる。

先づ準備委員本田克氏は進んで一寸挨拶のあと本日の會合は加治木同郷會發會式と稱するも、同郷會は未だ大方の賛同を得て、既に成立しておるといふわけではない。で時を失してちと滑稽の感はあるが、發會式に先づて、同郷會に就て諸君の賛同を得ぬければなら

ぬといふ意味の辭を述べて退き、直に柚木慶二氏を議長に推して、成立會といふやうなのを起した。

同郷會の主旨には不賛成はないので同郷會は成立した形として、雜誌桜城は閲讀を希望する人にのみ配付することに決し、會則に付協議を經たいとて、曾木新三氏は立ちて會則を朗讀する。

これに一二の質問がある。準備委員よりの解答がある。會則に異議はないことを認めて、會長の推舉といふこととなつた。

ここで柚木氏は議長席をすべる。男は立ちて、不肖ながら今日までの行きがけり上、自分が當分のところ

会長の席をけがす、といふやうな挨拶があつて、會長より商議員、編輯員、會計員を指名せらるゝこととなる。(その氏名は別項參照)

それが終つて暫時休憩、いよ／＼發會式にうつる。

會長は壇に登りて、同郷會の目的事業の貫徹、雜誌の盛衰繼續は委員は勿論、會員の誠意助力に俟つものの大なることを述べて、將來に長き愛護を希望して退かれ、次に加治木中學校長相良三之助氏の熱誠なる祝辭演説、村長上村與八、原田定吉両氏の祝辭朗讀、新納時

亮氏は代理を以て祝文朗讀、東孤竹氏の祝辭演説ありて、本田氏は各地より來れる祝詞の電文を朗讀した。右終りて直ちに宴にうつる。この時まで引きつゞき出會した人數は豫測の倍を超えて乃ち二百名場にあふれ、席側に立つて貰はねばならぬやうな氣の毒なことになつたのである。

それでやむをなす、席を庭に設けて、酒肴をろこに運び、立食の饗といふ不行届きを我慢して貰ふこととなつた。酒三行、微醺を帶びて歎いよく加はり、興ますます臻り、會長の發聲にて加治木同鄉會萬歳を三唱し、杯をあげ、眉を暁ばして、皆衷心會の成立を祝賀するさま、和氣溶々としてたなず堂をめぐり、瑞氣鬱鬱として室にあふれた。

況してや此間たなず、二個所にありて蓄音機の興を添ふるあり。會衆二百陶然として歡樂他意なきさま、太古擊攘の民をこゝにうつしたるが如きを見、よろこび極まりて泣かんとするものがあつたのも、今日迄幾乎か心を勞し來つたことのこゝに到つた快心の極みといはば、女々しいも亦無理ならぬことを見逃して貰はねばならぬ。

かくて五時過ぎ島津男の一行場を辭せらるゝや會衆はたのがトゞ、參々伍々と散會した。遅かつたのは黄昏時までも殿戦して氣焰をあげた勇者もあつたので。

意外の盛會！ 意外の成功！

是れわれ等が企の、天の心をなた故でもあらうが、要するに村民諸君が愛郷の至誠一にこの結果をもたらしたといふに外ならぬこと、信ずる。

願はくは、郷人の心こぞりて、永久に、同鄉會の上に汚がれ、會の休戚を以て、互みに自己のころとなす、尊き精神を發揮するにつとめられ度いことを。

因に當日祝電を寄せられたる諸氏は左の如し
山之内修一君 篠原長千代君 新納豊二君 濱田精藏君 白尾寅千代君 白尾源吉君 原田維織君 本田親二君

● 東宮殿下の御來魔

我縣民が數旬前より一日千秋の思を以て待ち奉りたる。東宮殿下は去十月廿六日午前十時の頃御着港、一時半東郷大將、村木武官長、岩倉樞密顧問等を隨へ御上陸遊ばされ萬衆の熱誠忠實なる奉迎を受けさせられ鹵簿蕭々御旅館磯島津公爵邸へ成らせられたり、

同標を正ふして整列し満腔の誠意を以て鶴駕を迎へ奉れり。

● 献上品

斯くて翌二十七日は縣廳、造士館、興業館内物產陳列所へ行啓遊はされ、廿八日は第一中學、師範學校へ成らせられ夫より城山へ御登臨の上英艦の砲擊、十年戰役の史蹟を御下問遊はされ、更に南洲翁洞窟及終焉地に臨ませられ草莽の舊跡爲めに光彩新なるものあり三州の臣民誰か聖慮の辱けなきに感泣せざるものあらん。二十九日伊敷練兵場に於ける各學校聯合運動會と御台覽の上、玉里邸へ成らせられ次に高等女學校に行啓遊はされ午後一時半頃同棲御出門幾萬の蒼生肅然として御奉送申上る中を御機嫌いと麗しく御通過遊はされ第一機橋より水雷艇に召され暫く櫻島近海御遊航の後御召艦香取に御乗組み相成りたり、斯くて翌三十日午前六時御召艦香取は鹿島を先導に出雲、常盤、淺間、磐手、對馬及驅逐艇十四隻を隨へ威風堂々として拔錨せり、御滯魔中御通行の沿道筋には到る處毎日幾万の學生、拜觀者堵を作りて奉迎し、爽颯たる御英姿、堂々たる御威風を拜し奉りて皆一種曰ふべからざるの感に打たれ只益々敬仰の念を増すのみ、我村よりも奉迎の爲出魔せる者非常に多く停車場は常に雜沓を極めたり、我各小學校生徒壹千有余名は二十九日曉天三隻の汽船に乗込みて出魔し祇園神社側に一

今般 東宮殿下本縣へ御行啓に付本村よりも當地の名產として、龍門司燒陶器を献上せんとの事あり、新納時亮、佐藤平右衛門の兩氏最熱心して専ら其の事に當り、親しく小山田の工場に臨み、職工川原次郎太其他を集めて協議を重ねしこと數回、終に新納氏は曩きに歐米漫遊の際實見せられたる、埃及、羅馬其他古代の陶器類を參考して意匠惨澹の後數個の圖案を得て之を職工に示せしに、職工又覺る所あり乃ち齊戒沐浴日夜丹精を凝して之が製作に從事せり、以來新納氏數十日間風雨を厭はず、毎日工場に至りて職工を指揮督勵せしかば、花瓶、香爐、植鉢等三十余個の素型全く成り、何れも結構精密を極めぬ、これより釉薬を加へて窯中に移せしに、圖らすも龜裂を生して不用に歸せしもの數個ありしも其の大部は完全に出来上りたれば、皆な愁眉を開きて多日苦心の甲斐ありしを相ひ祝せり、而して其内些の瑕疵なく形狀、色澤全て優秀のもの、花瓶壹對香爐壹個を撰びて献上品と定めたり、

花瓶高さ壹尺貳寸、香爐壹尺、共に漆黒の地色に同窓
獨特の釉彩琉璃玉ナガシ鮮かに古雅清麗の風致到底從
來の龍門司焼の比儕すべくもあらざりき、乃ち之を表
裏同様の白地羽二重に包み、尙ほ同地の布團にて周圍
を被ひ、之を本縣の特產とも稱すべき樟材の箱に藏め
、更に紐帶を施せる木理精雅の杉箱を以て外部を飾り
、茲に始めて献納の裝置を終へ、村長上村與八氏、村
民惣代として左の龍門司焼由來概要の記を具し、知事
を經て滞りなく之が献上の手續を了りぬ、于時十月二
十六日鶴駕奉迎前四日なりき

龍門司焼の由來

往昔豊太閣朝鮮征討の役、舊藩主島津義弘凱旋歸國
の際、彼の地より數人の陶工を従へられしか、其後
藩の各所に工場を設け茶器等を製作せしめたり、其
内芳仲なるものあり後歸化して姓を山元と改む、子
孫碗右衛門に至りて今のが加治木村小山田に移り、其
技術を普く邦人にも傳へ、爾來連綿今に至りて其業
を營めり、龍門司の名稱は蓋し窯場元龍門寺の邊り
に在るを以てなり

●高齡者

對の造花生花に次ぎては紅白の旗數流、神饌、梓櫃、
齋主井上千春以下神官伶人十名は人車にて之れに續き
、白木の靈柩は當村より特に參邸せしめたる人夫十名
之を擔ぎ、喪主久賢男爵は黒色の喪服を衣け青竹の杖
により白衣の家扶に扶けられて、悄然として之れに隨
ひ宗族親族何れも徒步奉供し、一般會葬者人波を打ち
て之れに續き最後に加治木小學校生徒參列せし爲め、
行列は約數町の長さに涉り、豫定の道筋を堅馬場に至
るや今迄一天墨を流したらん如き濃雲早くも破れて、
涙の雨は肅々として降りしきる中を莊嚴なる行列の練
り行く様拜觀の群衆をして、いどゝ哀悼の念を催さし
めぬ。かくて福昌寺墓地なる祭場に達したる頃は雨も
稍や小歇みとなり、之より先き場内には天幕數個
を張り祭壇は白布を以て覆はれたる假屋を設け用意既
に整頓せしかば直に祭典は始まり先づ井上齊主の祭文
次に喪主久賢男の誄詞加治木村民総代上村々長の弔詞
朗讀あり、終りて男爵及夫人直子久明男貴暢男其他
親戚順次玉串を捧げ、相良子爵代拜菊池家令を初め一
同禮拜をなして午後四時三十分式は全く終りぬ、茲に
柩は深固院なる先塋の墓側に移され、青葉繁き福昌寺
の中腹苦蒸し水冷かなる邊りに葬られ了んぬ、此日の

東宮殿下御來縣に付縣下八十歳以上高齡者の調あり
しが村内の分は則ち左の如し

八十歳以上八十五歳未満の者 五十二名

八十五歳以上九十五歳未満の者 十一名

九十五歳以上九十五歳未満の者 八名

九十五歳 加治木町 櫻木モヨ

百 歳 西別府 德丸利助

右高齡者の中九十四歳の鮫島さだ子は自製の白縗子守
袋を、八十三歳の新納たづ子は同しく自製表紫縮緬白
二羽重の寶袋を 東宮殿下へ献上せられたり、目出
度ことにころ、

島津男爵家記事

●男爵母堂の葬儀

島津男爵母堂健子様の葬儀は神葬式を以て去る八月廿
二日執行されたり、今其概況を記さんに此日朝來天氣
快晴なりしも正午頃よりは俄然黒雲天にみなぎり、暗
澹たゞ光景天地も亦自から愁傷の色を呈わせるにも似
たり軽て棺前祭も終り一刻午后三時となるや、先驅を
初め肅々として長田町なる邸宅を出棺せり、先づ拾餘

會葬者は千頭知事、大久保中將、岩崎高等學校長、田
中稅務監督局長、上村市長、宮里商業會議所會頭、染
川市會議長、花田中佐、両新聞社員を始め官民有志紳
士淑女等無慮四五百名、更に加治木よりは村吏員村會
議員重なる有志者及び高等小學校男女生徒併せて三百
名餘出處參列し極めて莊嚴なる盛葬なりき。因に本村
より人夫拾名造花一對、加治木婦人會及び錦江義會よ
り造花一對づゝ、村内各小學校及三學舍より旗一對づ
ゝ寄贈せり。

●島津男爵の寄附

舊領主島津久賢男には去る十月六日故母堂健子の五十
日祭典を營まれたるが追善供養として親族其他に配付
すべき菓子料參百五拾圓を以て左の團体に寄附せられ
たり

一金壹百圓

桜城小學校

一金六拾圓

鹿兒島養育院

一金五拾圓

鹿兒島縣私立教育會

一金參拾圓

慈惠盲啞學校

一金拾圓

鶴山學舍

一金拾圓 鹿兒島婦人會 加治木青雲舍
 一金拾圓 同 郁文館
 一金拾圓 同 同盟教育會
 一金拾圓 同 錦江義會
 一金拾圓 加治木婦人會

本誌發刊に關して同新聞社は多大の便宜を與へられ殊に第一號口繪は同社の寄附によるものなり謹みて茲に其の厚意を感謝す

◎鹿兒島新聞社の厚意

本誌發刊に關して同新聞社は多大の便宜を與へられ殊に第一號口繪は同社の寄附によるものなり謹みて茲に其の厚意を感謝す

◎本村歴史資料調査

本村同盟教育會は、今夏期總會に於て、本村歴史資料を調査すべきことを議決し、鈴木正次郎白尾彦助岩城豊次の三氏を該委員に選定し、これが調査を囑托したり。依て三氏は、或は記録によりこれを暗寫し、或は先輩につきてるの記憶を叩くなぞ、熱心に諸種の方面より其材料の蒐集に努めつゝあるも、如何せん史籍の傳はるもの極めて缺く、これまで委員の索め得たる記録の重なるものは、僅かに加治木古老物語及び枕といふべし。

◎農事の概況

本村住民の過半數は農業に由りて衣食するものなるが故其の状況の記述は本村經濟的状況を知らんと欲するものに對して極めて緊要の實事なると思ひ左其の概況を報せんと欲す然れども統計的材料の供給十分ならざりしが爲め聊か杜撰の廉なき能はざるは深く讀者の寛容を乞ふ所也、田舎の小都會に於ては分業未だ十分に行われず諸種の業務を兼ねて其の經濟生活を營むもの多し獨り都市的業務の兼業のみならず都市として完全に諸般の條件を具備すること能はざる自然の結果商工の徒にして多少農的行爲をなすものあるは勢ひ免かれざる處なり、吾が郷の如き一部分商工業の區域を存して小都會の名を冠せらるゝ地に斯の如き現象の存

城名勝誌の二種のみにて他に適切の資料を得る能はざるに苦しめりと云ふ、されど來春の會期までには必ず完成を告げ、以て同好者にも頗つべしといへば、本村歴史研究上好参考書たること疑なかるべし。眞の愛郷心の養成は、其郷土を明瞭に意識することによりて、始めて得らるゝものにして、且古老は歲月と共に物故しつつあれば、今に於て事蹟の煙滅を防ぐは緊要の事ならんと信す。委員は各種記録の借覽を希望しつゝありといへば、幸にこれを所蔵する人あらば断片尺錄と雖も紹介の勞を惜むことなく、以て調査資料の豊富へ期したきものなり。

◎本村教育會

本村各小學校職員、及本村長常務學務委員諸氏は、教育の進歩を圖り、且相互の交誼を厚うせんため、夙に教育會なるものを組織し、毎年二、五、十月を以て輪番に各校に於て開會することとなり居れりと。第十一回例會は、去る十月五日中野尋常校に於て開かれぬ、ろの状況を畧記せん。當日は夜來の雨小止みならぬ、且會場の僻遠なるに拘らず、篠つく雨を冒して來り集るもの四十餘名。先づ當校に於ける實地教

在は之を事實に徵せざるも明かなることなく又士族小路なる特種の區廓を有し、其の住民の職業が一種變態にして半農的のもの多きの事由に由り嚴密なる職業の區別をなすこと甚だ難しと雖も今専ら農業に從事せるものの戸數を見るに、

反 土 戸 二五五 戸

西別府 二六〇 戸

小山田 二三〇 戸

木 田 三五〇 戸

日木山 一〇八 戸

総 計 一、一九八 戸

にして之れを加治木村全戸數(統計手元になし)に比せば蓋し農家の數大多數なるべく本村の經濟政策を樹立せんと欲するものは先づ農民の状況を審かにせざるべからざるや明か也、乃ち彼等に由りて耕作せらるゝ土地は、

一、田地 町 反 留步

本 田 二七九、一、三、二三

西別府 一二七、五、四、二九

小山田 九四、〇、三、二九

日本山、二七、三二、二八
二、烟地、六四七、三三、一九
反土、三六、〇一、一六
町 反畝 步

木田、六九、七五、一〇

西別府、二一四、一八、〇四
小山田、二二一、三二、二六
日木山、一五五、七八、〇五

総計 五一七、〇六、〇一
兩者を合し耕地の総反別壹千百六拾四町參反九畝貳拾
歩にして農家一戸に付き耕地平均實に九反七畝〇五歩

強なり、而もこれ絶對數なるが故若し総耕地より半農
の徒の耕地及び商工業者の兼業的耕地を扣除したるもの
を各戸に平分せば如何、更に一步を進めて豪農の家
は實際に於て數町歩の耕地を有すべければ全トく之等
の全耕地をも除去し所謂中農以下の一家に對する平均
耕地を算出せんか蓋し思ひ半ばに過ぎざるものあらん
嗚呼彼等は斯の如き僅少の耕地を耕耘し而も其の耕地
は自家の所有に屬するもの極めて少く收穫の過半は之
を小作料として地主に提供せざるべからざるや必せり
彼等が一家數人の口を糊し寒暑を凌ぐの資料は眞に其

菜種子 三一五石
甘 諧 一三五、〇〇〇貫
麥 一三、〇八五石
四、九八九石

城
城
の涙なき能はざる也
如上の事實は須らく經濟家の三思すべき題目にして之
等小農に對する救濟の策を講するは目下の急務なりと
雖とも編輯終局の時刻目曉の間に迫れるの時不完なる
が故精細の調査と正確・推論は之を他日に譲り更に既
集の材料の記述を爲せば、昨三十九年度の收穫高中
材を基礎として遠かに推論を試むるは誤謬の基なる
事例を爲せば、昨三十九年度の收穫高中

本年は目下米の收穫期に屬し未だ其の正數を示し難き
粟、陸稻、蕎麥、芋等の如き亦天災の害するもの少か
りしが故執れど平年作以上なれば農民鼓腹の樂みある
ものゝ如し（本年度の麥及菜種子の收穫高は既知數な
るものゝ如し（らんも材料の供給なき爲め記載すること
能はず、併し）
何れも平年作）

農業技術及び經營發達の程度は縣下普通農事改良に伴

ひて進境を見しも郡内に於て未だ中位に位せるが故多
少改良すべき点なきにしもあらざる可、而も耕地の全
面積狭隘なるを以て擴張の余地なきを如何せん殊に桑
園地として充用すべき土地なく僅かに現下桑植村総反
別八町七反歩を有するのみなれば蠶業の發展は蓋し期
待し難きことなるべし只だ一縷の望は鐵道を利用して
桑葉を他村に仰ぐの策にして殊に近村溝邊の廣漠なる
畑地の經營は有望ならずんばあらド、茶も亦桑と同理
由にて拾參町五反歩の園地を有するに過ぎず將來の増
加は蓋し不可能の事ならん、
時に近時注目すべきは、水田二毛作地に於て往々麥作
に代わるに菜種子の栽培を爲すものを見る事と、四十
年度より本村に於ても煙草の栽培を許可せられ少しく
之れが試作を爲すものを生ぜし事之れ也、菓樹の栽培
を利用して收益の源泉となさんとするの傾向を生ずる
に至れり。其の果樹園として企業的經營を爲せしもの

の嚆矢は實に濱田與一郎氏が其の邸内に於ける夏密柑
山地を開拓して夏密柑「チーブル」溫洲の三種大約二
千本を栽培し未だ豫定の年限に達せざるも既に貳百

圓位の収益ありと云ふ加之氏は此處に別墅を構へ其の
奇富怪石と絶佳の眺望とを利用して収益の外享樂的經營
をなせるは盡し理想的果樹園也と云ふ可し、同好の
士杖を曳て往て之を訪ふにも亦可ならずや、小山田猪
の目に神村武五郎、新納平十郎、曾木悌二の諸氏亦た
柑橘園を經營しつゝあり、又梨園を湯田三次氏一反歩
位、曾木悌次氏前記の柑橘園と同所に經營中に屬せる
が其の成績未だ審かならず蓋し梨は暖國に於ては樹幹
及び果實の蟲害を蒙ると多く周到の注意を要するもの
ありて梨園の經營は甚だ至難なりと云へば其の成績如何
は大に今後の企業に對して影響すること大なるを思
ひ諸氏の奮勵を切望して已まざる也、斯の如く吾が農
界に於て特種の經營を企圖するもの簇々輩出するに至
りしは誠に祝すべき現象也と云ふ可し、
以上本村農界に於ける現況の梗概なりとす其の詳細は
他日更に報告するの時期あらう乎、

これを拾四學級に編成してゐる。別に修業年限二ヶ年の育英校が附設され、高等科卒業生を入学せしめ、必要な智識を補習せしめつゝあるが、ろの生徒數は二學級七拾四名である。

二、卒業生、當校の創立は、實に天明四年毓英館の設立にありとのことである。明治の代となつてからは、學制と共に幾多の變遷を重ねたが、十八年官制大改革の際、學校制度も積極的建設を試みた結果、當校に於ても翌十九年三月、第一回の高等小學卒業生拾六名を出し、爾來回を重ねること二十二、卒業生の數は實に八百五十余名の多さに達し、又在學中中等學校へ入學したものは百四拾余名、何れも今や各方面に活動しつゝあるといふ。(卒業狀況調は次號に掲げん)

一、出席歩合、本年九月中兒童出席の歩合は、尋常科九六、五一高等科九七、九七、兒童學業の成績は、

除外例もあらうが、大方は出席の如何に比例するとの注意を促したいものである。

一、トラホーム検査の結果は、尋常高等通して、全患者の

數五拾六名あつた、これを本年四月の検査の結果に比

較すべしと、拾八名減して居る。これは當校が、ろの豫防と治療とを督屬した結果であらう。

一、教授訓練、教授訓練の方法については、形式的研究のみならず、常に新知識の提供と、實際的人物の陶冶とに務めつゝあるが、特に訓練には重きを置いてある。本年夏期休暇の際は、兒童の放送と懶惰とを未だに防ぎ、寧ろ良習慣を養ひたいといふので、各學年相應の程度に、兒童の修養事項、學習要項及衛生心得書などを調製し、各生徒に配與し、これが實行に努めさせたといふことである。ろの修養事項なるものを左に紹介しやう。

修養事項 (高三)

一、朝の誓約、朝は早く起き顔を洗ひ心情を淨め、左の誓約事項を読み、正善な行をなすべきことを確く心に誓へよ。

一、誓約事項

學習、今日ハ日課表ニヨリ、與ヘラレタル事項ヲ、怠リナウ學習スル。

撮生、今日ハ衛生心得ヲヨク守リ、充分ニ撮生ニ務勤勉、今日ハ家事ヲ手傳ヒ、喜シテ勞動ニ從事スルゾ。

孝行、今日ハ親ノ命令ニ從ヒ、親ノ心ヲ安シズルコ

一、校舍、當校校舎は曩に二棟六教場のみは、すでに改築されたが、會々日露の交戦となり、止むなく事業を中止するとになり、荏苒年を経るも今日まで其儘に打ち過ぎつゝあるのである。既に數年前に改築の必要を認めて校舍四百四拾坪七合五匁の工事設計を立て

爲めに敷地も貳千八百六拾七坪に擴張したのに漸く前記の新校舍百貳拾壹坪しか竣工してはいないのである

から、今や殘部の校舎は、不完全の極に達し、教授上不都合の點多く、殊に光線不足のため、あたら兒童の視官を傷ふことが勘からぬ事實なぞは最も村民の猛省を促したい点である、將來の國家は今日の小國民諸君に俟たねばならず本村百年の繁榮策は先づ之等小國民の教育を完全になすべきにあるのに斯る不都合があるのは本村の爲め遺憾に堪へぬことではないか吾輩は一日も早く全部改築の日を切望して已まぬのである。

一、職員 現在當校に奉職せる職員は、校長原田定吉氏を始め、緒方英吾(岩川)丸目長光、貴島佐吉、岩高ニ酒匂廣志(西町ヒ)綴方に高三中摩文雄(竹下順)の二名であつた。

因に本村出身者で右の外、枕女高四佐藤テル(書方)全高四美坂ツマ(圖畫)永原尋校片坂廣志(書方)の三名も全しく選に入つたこのこと。

一、職員 現在當校に奉職せる職員は、校長原田定吉氏を始め、緒方英吾(岩川)丸目長光、貴島佐吉、岩

(左の文章は此度のなりと謂ふ)
皇太子殿下本縣行啓の際臺覽に供せしもの
前出記事参照)

嗚呼戰死也吾我死

桜坂男士等高小學校 高三 中摩 文雄
、花に嵐のなかりせば、世に恨はあらざるなり。

我等は將來兄君の御心をつき、學を研き德を修め、立身出世
以て君のため、國のため、力を盡さんこそを期せん。嗚呼兄君
の靈よ、希くは安かれ。

◎教育家の譽
尋常高等小學

我兄君は、明治三十六年十二月を以て陸軍士官學校を卒業し、翌二月陸軍歩兵少尉に任し、正八位に叙せられ、近衛歩兵第二聯隊第四中隊附となり、全年三月征露第一軍に従ひて、鴨

清國奉天附近に於て、武運^{たけなくも}、商部^{なむき}、勳^功五級、旭日章及金鵄勳章を賜はる。

さと、親しき兄弟、別るる程悲しきはあらざるべし。谷間の鶯
は花を待ち、雪裡の梅は春を待つ身にうれしき甲斐あるふのを
、我は何を頼みすべき。あゝ我胸中忘れんとして忘るゝ事能は
ざるは、兄「面影ミミ」されどよくよく考ぶれば、屍を戦場
に曝すは軍人の本分にして、殊に日露戦役の如き振古未曾有の
國難に殉したるは、寧ろ家門の榮譽にして少じも遺憾とする所

君が就職後十五年の勤勞の結果の賜物として、此に紀念品・時計の金鎖一個を贈呈す、元より不腆にして、其萬一に當らすと雖も、聊か以て君を慰するの具たるを得ば、誠に幸なり、君夫れ斯道の爲めに自愛せよ。

小杉恒右衛門氏も前記佐藤氏と同しく同材同形の大華表柱を凱旋紀念として、昨年官幣大社霧島神社へ先月同格鹿兒島神社へ奉納せられたり、而して鹿兒島神社のものには、東郷海軍大將の筆に成れる敵國降伏の四大文字を刻入せり、是等の舉は永久不滅のもの、萬世に亘りて奸個の紀念物たるを得べし、

佐藤平右衛門氏が村内公益の爲に盡されることは、前號にも記する所ありしが、今回は日露戰役紀念として、鹿兒島照國神社へ石造の大鳥居を奉納せられたり、石材は同氏所有の本村日木山なる二瀬戸石を用る、柱石の高さ二十尺周圍四尺八寸冠石の長さ二十五尺周圍五尺七寸あり、之に彫入の日露戰役紀念の文字は、上村海軍中將の筆にして、新營の社殿と相應ドて一段の莊嚴を極めたり、

因みに記す同氏は近來大に氏の本職たる肥料業の擴張に力め、昨年新に鹿兒島市生産町阿蘇橋涯に廣大なる和洋折衷の支店を開き、原料を清韓より直接輸入し來り、之を廉價に販賣して農家の便宜を謀りつ

橋の下方両側數町に亘る堤防に植付け、黒川をして櫻川の往昔に復するの企をなせるが如き、何れも土地の利便繁榮の爲に謝すべき事なり、而して氏は又已れの本業に於ても大に擴張を圖り、目下本宅の改造と鹿兒島市易居町へ支店の新築工事中なり、

◎在米同胞の特志

在米の精松章一、松田傳之助、藤崎英二、立山清藏、楠元彦市、湯田仲次、竹下貞彦諸氏は枕城校使丁中馬翁に對する寄附金募集の件を鹿兒島新聞に由りて知り此の如き企は獨り本人の爲のみならず又以て世の誠鑑として表彰すべき十分の價値ある事なりとなし大に此の舉を贊同し七圓余の金圓を寄送せられたり、萬里の異域に在りて向は故郷の事を思ひ遙に同情を寄せらる其特志亦た表彰に値ひせずや。

◎社格の決定

曩に全國神社社格確定に關する法令發布せられ之に基きて吾が郷内に鎮座せる各神社の社格左の如く定められたり而して之に洩れたる神社は無格社なりとするも祭典の時郷社へは郡長村社へは村長參拜して各郡村の幣物を捧ぐ可き規定なりと云ふ。

鄉社 春日神社 村社 岩原神社(反土) 山王神社(日本山)
隈姫神社(木田) 鎮守神社(西別府)
大井上神社(小山田)

◎美事一束

本年度に入りて以來本村の爲に金品を寄附せられたる篤志家に就き吾人の聞く所を左に掲げん。

▲川上親晴君は今春歸省の際學校基本財產として金壹百圓を寄附せられたり、

君は人の知る如く我郷の先輩にして、一昨三十八年警視廳主事より轉して現に富山縣知事たり、而して君は此の義捐の外同盟教育會婦人會等へも若干金を寄附されたりと云ふ。

▲川崎祐義君は故川崎平次郎氏の息なるが、君は亡父の五十日祭費を省き金參拾圓を同しく學授基本財產へ寄附せられたり、
平次郎氏は、教導團出身の軍人なりしが、退役後は専身を教育に投じ、明治三十年縣立加治木中學校創立以來体操科教員として勤績し内外の信用厚かりき君は此の義捐の外同盟教育會婦人會等へも若干金を寄附されたりと云ふ。

、然るに昨年の夏病を獲て終に逝けり享年四十有一

▲中摩定助君は、亡息昌中友次郎氏の祭費を以て同し

く學校基本財產中へ金拾圓を寄附せられたり

友次郎氏は滋賀縣商業學校出身にして、嘗て鹿兒島

、都城の商業學校教員たり、後贍志を齋らして、遠く

濠洲に渡り更に北米に轉じて、大に發展の策を講じ

つゝありし俄然病魔の襲ふ所となり、昨三十九年

の春三十四歳を一期として溘焉骨を異域に埋めぬ

▲上村良太郎君は曩さに當村避病院へ消毒用器械を寄附されしが、今回又亡弟野添金人氏の三周祭に當り、

金人氏は去る三十八年加治木中學校を終へ、後福山

小學校に職を奉じて體力校務に鞅掌し、傍ら夜學舍

を開きて、其地青年の志氣を鼓舞せられ、大に父兄

の信任を博しつゝありしが時偶々日露の戰役に會し

召されて軍務に服し、圖らすも病に罹りて、空しく戰場の露と消えぬ、春秋僅に二十四也。

▲伊藤世傑君は、亡息貞氏の五十日祭費を節して學校基本財產中へ金貳拾圓を寄附せられたり、貞氏は加治木中學校の四年生にして、才學衆に秀で勤直の譽あり前途多望の青年なりき、今夏暑を温泉に避け、大に英氣を養ひつゝありしが急症を煩ひ、

家に歸りて療養怠りなかりしも、藥石其効なく花未咲くに至らず十七歳にして夭折し終へぬ

▲岡山秀延君は當地の有志にして又豪家たり、常に本村の盛衰を念慮せらる、曩さに當授產場分教場が多くの工女を收容して、大に産業の發達を謀り、併せて從業者の家計を助けつゝあるを喜び、工女獎勵費として金拾圓を寄贈されたりと云ふ。

▲杉田平助君は當地の開業醫なるか、日露戰役の際日本赤十字社救護班醫員として小倉に至り大に尽す所あり、爲に今回從六位勳五等の賞賜を受けらる榮譽の至りなり、此程君は之か祝宴を省き金參拾圓を學校基本財產に寄附せられたり、而して君は又往年臺灣より歸村の際には同地の產物並に土人の器具等を數多枕城小學校へ參考品として寄附されしことあり

▲岸野七郎君の事は、前號に記する所ありしが如く、君は常に村營造林の事に尽瘁せられ、老齡ながら遠く西別府鼓ヶ尾造林地に至り親しく指導督勵せられつゝあり、それのみならず今春樹苗植付の際は、苗木購入費中へ金五圓を寄附せられたりと云ふ。

去九月廿五日本縣會議員の選舉執行されたるが始良郡に於ける當選者は左の如し

永田貞雄(牧園) 山内慶治(西國分)

瀬戸山良敏(山田) 牧元喜右衛門(國分)

因に十月十九日臨時縣會を開き議長以下役員の選舉を行ひしに其結果左の如し

議長 奥田榮之進(日置郡串木野村)

副議長 鮫島慶彦(川邊郡加世田村)

參事會員 志々目藤彥(指宿郡) 永田哲二(日置郡)

日高晶(薩摩郡) 西村種禮(出水郡)

兒玉好熊(伊佐郡) 永田貞雄(始良郡)

始良郡郡會役員選舉の結果左の如し

議長 小城親友(吉松) 副議長 神崎磐松(清水)

參事會員 本田雄熊(東襲山) 是枝快房(加治木)

肥後竹熊(重富) 森山要一(横川)

山下兼雄(西襲山)

○加治木在郷軍人會

秋氣大會を去る九月廿四日午后三時廿分より枕城高等

小學校講堂に於て開催せり會するもの百余名新納海軍

大佐他二三士の演説等あり頗る盛會を極め夕刻退散せ

金壹圓 上原善之丞君
金壹圓 溝口直記君
金壹圓 川原鐵之助君
合計金拾四兩也

金五圓 新納時亮君
金貳圓 杉田平助君
金貳圓 溝口近君
金貳圓 赤崎芳彦君

金貳圓 赤崎芳彦君

着々治績を擧げられたるを謝する旨を述べ 岩脇氏又
た末席に起つて簡単に謝意を表し 程なく酒宴に移れ
ば一郡の英雄杯を擧げて三亭に相呼應高談快語興趣尽
くるの期なく稀に見るの盛會なりき 因に同郡長に対
し郡衙吏員一同 郡内有志者等は 各紀念品を寄贈し
たりと云ふ左もありぬべきことにして

○大山郡長歡迎並に稻恒氏慰勞會

新任始良郡長大山綱任氏の歡迎會に兼ねて枕城出身前
肝屬郡長稻恒重節氏慰勞會を去る八月二十日午後五時
半より加治木町小松屋に於て開催せしに來會者百余名
本田氏開會の辭を述べ大山郡長の謝辞稻恒氏の謙讓的
退隱談あり夫れより酒宴を開き両客へは献酬交々到り
て殆んど寸暇なく主客十二分の歡を尽し十一時頃退散
せり

○驛長送迎會

前始良郡長岩脇武男氏が去る七月中薩摩郡長に轉任の
命に接せられし爲め郡内十八ヶ村の有志者同月三十日
之れが送別の宴を 加治木町小松屋富士屋若竹の三旗
亭に於て催せり 出會するもの無慮二百五十余名 熟
れも蒸すが如き炎暑を冒し 遠路に厭はず來會せしは
以て氏の輿望に副ひしを想見するに足らん 聽がて席
定まるや 本田克氏は岩脇氏が既往二年間に於ける
在職期間の甚だ長からざる拘はらず 誠實熱心以て

加治木驛長泉錄太郎氏は栗野驛長に轉ト其後任に鹿兒
島驛助役濱島彥助氏就任せしに付き去る五日有志五十
名は當町小松屋に於て送別歡迎の宴を開けり泉氏は職
務上は勿論當地方繁榮策上尽瘁されしこと少からざれ
ば同氏の轉任は實に惜むべき事なり

因に本會は漸次其目的を貫徹せんが爲め總會毎に一二の實行問題を協約し、之が實踐と躬行とに勉めつゝあ
りと今其實行問題を列記すれば左の如し

一、定められたる時間を遵守すること

二、多人數集會せる宴會場に於ては相互の獻酬をなさ
ざること

三、本會員にして若し不幸死亡せる者ある時は、其方
限幹事に於て本會を代表して弔問會葬すること、

四、各戰役戰死病歿者の遺族として家計困難なる者あ
らば本會に於て救護の道を講ずること、

依て其方限幹事に於て事實精査の上本會に報告すること、

◎佐藤式潰碎機

當町佐藤新太郎氏は多年苦心の末蒸甘諸潰碎機を發明し製造販賣せしに燒酎釀造の好評を博し、昨年末專賣特許の出願中、更に改良すべき個所あるを發見し、追願したるに頃日特許を得弘く製造發賣する由、機械の内部は從前の者に比し著しく改良され殆んど完璧に近しと云ふ。如此は獨り當人の名譽たるのみならず實に本村の榮と云べし。

◎加治木中學校旗新調

同校にては先軍失火の際校旗を鳥有に歸せしめし爲め其の新調を鹿兒島市女子興業學校に囑せしが今回成就して之れが奉載式を擧げたり。同旗は地質を紫縮絨とし流れ四尺幅三尺二寸中央桿の葉を青色の絹糸を以て繡出し更に中心は半形の赤菊を匂わして下部に「加中」の文字を現はして光彩陸離頗る美麗なる者なりと云ふ。

◎第七高等學校入學者

一部甲（英法科） 山上逸
一部丙（獨法科） 石神笑一
一部乙（文科） 丸目美良
一部乙（文科） 後藤實理

●多年清國福州武備學堂に奉職し居たる壹岐休太郎氏は辭任の上自下婦村中。
●今春來旅順口に在留せられたる法元定一郎氏は先程歸村。
●京都帝國大學法科大學生曾木新三氏は自下歸省中にて本誌編輯上大に尽力せらる所あり。
●曩きに東京美術學校を終へて宮崎中學へ圖畫科教諭として奉職の野田藤平氏は今般清國北京大學より聘せられ先月末日同地へ向け出發。
●今夏東京帝國大學獸醫學實科卒業の西吉原豐藏氏は陸軍見習獸醫官として東京近衛騎兵聯隊付を命ぜらる。
●專賣局加治木出張所長牧清澄氏は垂水同所長へ轉任。
●豫て東京滯在寫真術研究中なりし野田親志氏は先般歸村。

◎名物加治木饅頭

加治木驛でも去る八月一日より古來有名な加治木饅頭を賣出すこととなつた、製造元は停車場脇赤崎店であるが着車毎に(名物加治木饅頭は如何)と賣子の聲を聞けに、毎日辨當代用土產物用として中々賣口がいゝとして貰へば至極結構のこと、尙此上ビール、正宗、マツチに煙草まで賣出

格

城

(一十四)

城

枕

讀者との聲

●小上吉之助、藤崎未次、前出國友、木場政彦、長井虎造市來操の諸士は去る八月北米へ。
●久しく在米中の精松章一氏は此程歸村。
●臺灣製糖會社へ在勤の鹿屋武二氏は今夏歸省中なりしが去る十月中歸任。
●東北帝國大學札幌農科大學々生赤崎平八郎氏は先般・加治木郵便局長曾木彥二氏の養子となり令嬢秋子と合電の擧ぐ因に洋夫人は曰く鹿兒島縣立高等女學校の裁縫教師として奉職中、

會報

◎雜誌ノ件

強中ですが他郷のこそもドオゾミミ(係)匿名にては通讀の際情薄らぐの感あり可成本名を掲げて貰いたい(在京生)

●雜誌枕城第一號配付部數
在外者へ 貳百七拾四部
在郷者へ 貳百四拾九部
合計五百貳拾叁部

●雜誌購讀者申込數(本誌〆切當日迄の分)
在郷者 壹百七拾五名
合計貳百八拾八名

◎役員の件

▲會長の推戴

別項にも見ゆる如く去る十月十三日發會式の際滿場一致を以て島津男爵を會長に推戴する事に決し男の快諾を得たり

小僧)、年、四回の發刊では其の間が待ち遠ひをか隔月位に頤るものた(四十男)四十男さん私共も至極賛成ですが、ますこし基本金が出來なければ當分ちと六つかしく思ひます、それで澤山寄附して下さい(係)頤くは郷里の事情公私共に細大洩さず本誌へ掲げてもらいたい(懷郷生)折角御希望に副ほんこして勉

▲商議員推選

摩順藏	壹岐桃治	壹岐鶴吉	大内山精太	川
之助	川上親通	恒吉	金左衛門	杉田靜治 宅
二、の七十八君				
金參拾錢宛	上床幸助	木通重太郎	柚木郁之	
佐藤幹七	川原權太郎	黒木吉太郎	原田源士	
城敬治郎	下楠園仲太郎	高橋喜助	岩穴口新	
豊留龜助	池上金右衛門	美坂助七	竹内健助	
元惣七	万膳重雄の十七君			
一金拾五錢宛	重久定志	岡山秀助	松永勇助	
直助の四君				

◎在外雜誌講讀者住所氏名（申込順其一）

鹿兒島市長田町一七九	男爵	島津	久賢
全夫人	島津	直子	
全令嬢	島津	澄子	
海軍機關大佐	木佐木幸輔		
山林屬	後藤		
鹿兒島大林區署	實正		
東京牛込區矢來町四			

熊本縣守土和田村赤瀬假停車場助役	東京牛込區市ヶ谷山伏町六	學習院教授	安樂	直治
專賣局鹿兒島收納所	東京四谷區南伊賀町五二	土村	武治	全
東京麴町區飯田町五ノ三六福壽館	熊本步共第廿三聯隊第十一中隊第三給養班白尾國助	尾上	英藏	米良則保
東京麹町區五番町一八日吉館	鹿兒島新聞社	柚木彥五郎	柚木彥五郎	福岡縣久留米步兵第四十八聯隊第九中隊
兵庫縣津名郡由良町宇天川	第六師團司令部	記者木原巳之助	清國公主領嶺駒島通六丁目	東京牛込區市ヶ谷山伏町六
熊毛郡下屋久村栗穗尋高小學校	福島縣福島市	田中郁子	熊本縣飽託郡大江村九品寺紫山方	臺北廳舢舨製糖會社社宅
帝國鐵道廳長野工場	宮崎縣立農學校	大內山精太	神戶市京橋區木挽町二ノ三	東京市京橋區木挽町二ノ三
東京帝國大學法科大學	東京帝國大學法科大學	警視丸野實行	福岡縣久留米步兵第四十八聯隊第九中隊	神田清之助
宮崎縣西臼杵郡高千穗稅務署	宮崎縣西臼杵郡高千穗稅務署	技手原田經一	熊本縣飽託郡大江村九品寺紫山方	松彥
山口高等商業學校	山口高等商業學校	教輸岡山已吉	神戶市山本町一ノ三六浪速銀行社宅	前田直議
鹿兒島縣師範學校附屬小學校	鹿兒島縣師範學校附屬小學校	署長原田維織	佐世保軍港軍艦出雲	川畑平治
姶良郡東襲山尋高小學校	姶良郡東襲山尋高小學校	訓導池盛知	旅順市青葉町四四	白高直助
福岡縣久留米市中學明善校	福岡縣久留米市中學明善校	教諭川上武彦	少尉候補生少尉候補生	步兵少尉
岩手縣盛岡市高等農林學校	岩手縣盛岡市高等農林學校	獸醫科池田彪一	農業城川甚之丞	白高直助
長崎醫學專門學校	長崎醫學專門學校	校長秀彥	城川善藏	小學校訓導
		校長久保清彦	佐藤幹七	前田清之助
		校長岩田靜夫	柏原源太郎	神田清之助
				神田清之助

熊毛郡下屋久村栗穂尋高小學校	大內山精太 郁子
福島縣福島市	警視 丸野
帝國鐵道廳長野工場	實行 原田
第六師團司令部	經一 已吉
宮崎縣立農學校	岡山
東京帝國大學法科大學	教輸 技手
宮崎縣西臼杵郡高千穗稅務署	上野精之進 原田
山口高等商業學校	署長 下田 維織
鹿兒島縣師範學校附屬小學校	池 盛 知 瀬戸口政產
姶良郡東襲山尋高小學校	訓導 教諭 木通重太郎
福岡縣久留米市中學明善校	訓導 池田 莊助
岩手縣盛岡市高等農林學校	川上 武產
長崎醫學專門學校	獸醫科 池田 彪一
福水	秀彦

署長	下田 莊助
訓導	瀬戸口政彦
訓導	木通重太郎
教諭	川上 武彦
教諭	池田
獸醫科	彪一
福水	秀彥
長崎醫學専門學校	岩手縣盛岡市高等農林學校
福岡縣久留米市中學明善校	姶良郡東襲山尋高小學校
鹿兒島縣師範學校附屬小學校	山口高等商業學校

姶良郡牧園村三脉堂
香川縣高松中學校
佐賀縣立唐津中學校
鹿兒島大林區署

福岡縣若松町	九鐵管理局官舍	白尾寅千代
宮崎縣都城稅務署	稅務屬	伊地知新
姶良郡溝邊村尋常高等小學校長		金澤彥太郎
鹿兒島市小川町七七		
大阪府西成郡中津村光立寺四〇五ノ七		
奈良市西新屋町	商業興信所員	野村 熊彦
東京芝區愛宕男二ノ一二澤井方	巡查部長	池上 新岐
鹿兒島縣日置郡伊集院稅務所	屬	松下 利彦
鹿兒島市山口町九二	屬	上床 孝助
日野辰二	屬	田方 良彦

